



TITLE:

植民地統治ノ形式ニ就キテ(一)

AUTHOR(S):

山本, 美越乃

---

CITATION:

山本, 美越乃. 植民地統治ノ形式ニ就キテ(一). 經濟論叢 1918, 6(6): 767-779

ISSUE DATE:

1918-06-01

URL:

<https://doi.org/10.14989/127392>

RIGHT:

學大科法學大國帝都京

# 叢論濟經

號六第 卷六第

行發日一月六年七正大

## 論說

生命保險業者ノ保健運動

法學博士 財部 靜治

植民地統治ノ形式ニ就キテ(一)

山本美越乃

分業ヲ論ジテ 福田博士ノ教ヲ請フ

文學士 高田 保馬

所得稅ニ於テ所得ノ統一課稅ニ(二)完

法學博士 神戶 正雄

職工組合論

法學士 河田 嗣郎

露國ノ新まりるくす主義(一)

米田庄太郎

諾威ノ海運(二)完

法學士 小島昌太郎

## 時事問題

米價ノ調節

法學博士 戸田 海市

## 雜錄

元祿年間貨幣改鑄ノ由來

藤田 元春

戰費トハ何ゾヤ

法學士 小島昌太郎

赤穂ノ鹽田(一)

法學士 本庄榮治郎

# 植民地統治ノ形式ニ就キテ(二)

山本美越乃

古來各國ニ行ハレタル植民地統治ノ形式ハ、之ヲ大別スル時ハ、(一)保護統治、(二)特許統治、(三)直接統治、(四)自治統治ノ四種トナスコトヲ得ベシ、然レドモ是等ノ各形式ハ又各國各場合ノ事情ニ應ジテ必ズシモ同一ナラズシテ、其ノ間ニ多少ノ差異アルヲ免レズ。

## (一) 保護統治

凡ソ一國ガ某地方ニ於ケル他國ノ政治的及經濟的勢力ヲ驅逐シテ、此處ニ自國ノ勢力ヲ扶植スルノ必要ヲ感ジ、且其ノ機會ヲ發見スルニ至ル時ハ、直チニ之ヲ占領シテ純然タル植民地トナスカ、然ラズンバ是等ノ地方ト保護的關係ヲ開始スルコトニ依リテ自國ノ國權ノ伸張ヲ計ラントスルニ至ルハ自然ノ勢ト謂フベク、若シ斯カル場合ニ對内的又ハ對外的ノ諸種ノ關係ヨリ直チニ之ヲ自國ノ領土トナスコト能ハザル事情存スル時ハ、保護條約ノ締結ハ當然ノ徑路ニシテ、コハ消極的ノ勢力扶植策ヨリ積極的ノ領土擴張策ニ進マントスルニハ蓋シ最良ノ一手段ト稱セザルヲ得ズ、由來保護關係ナルモノハ條約ニ因リテ成立シ、國際法上ノ原則ニ從ヘバ強弱二國ガ互ニ條約

ヲ締結シテ弱國ハ強國ノ保護ヲ受ケ、内政ハ自ラ之ヲ處理スルモ外交・軍事其ノ他重大ナル政務ニ關シテハ強國ノ指導ヲ仰ガントスル場合ニ、所謂保護的關係ヲ生ズルモ、植民政策上ノ觀點ヨリセバ保護ノ觀念ハ更ニ廣義ニ解釋セラレザル可カラザルコトハ、嘗テ「植民地ノ分類」ニ關シテ論ジタル場合ニ述ベタル所ノ如シ。<sup>(1)</sup>加之、甚シキニ至リテハ勢力範圍中ニモ亦多少保護ノ觀念ノ包含セラレツツアルヲ見ル、例ヘバ某地方ヲ自國ノ勢力範圍トナス國ハ、外敵ノ侵入ニ對シテ該地方ニ於ケル住民ヲ保護シ、又或程度迄ハ其ノ地方ノ狀況ニ關シテ間接ノ責任ヲ感ズルガ故ニ、自ラ統治上ニモ容喙セシムルニ至ルハ明カニシテ、假令名義上ハ勢力範圍ト稱スルモ、實際上ハ保護的關係ノ成立セル場合ト殆ンド同一ノ行動ニ出ヅルノ必要アルコト敢テ斷シトセザルヲ以テナリ。

保護統治ノ形式ハ各國必ズシモ同一ナラズト雖ドモ、普通ハ保護國ハ保護地内ニ重要ナル政務ノ執行ニ參與スベキ代表者ヲ置キ、主トシテ外政處理ノ任ニ當ラシムルモ、該代表者ハ又往々自國ノ官吏ヲ行政各部ニ配置シテ間接ニ其ノ内政上ニモ關與シ、殊ニ財政上ニ大ナル權力ヲ有スルヲ常トス、既ニ外政處理ノ任ヲ保護國ニ委ヌル以上ハ、自ラ他國ニ對シテ自由ニ宣戰講和ヲ爲スノ權ヲ有セザルコトハ明カニシテ、從テ其ノ軍政ニ關シテモ亦保護國ノ權力行ハレ、即チ保護國ハ保護地内ニ守備隊ヲ駐屯セシメテ之ガ防備ノ任ニ當リ、又假令保護地自ラ軍隊ヲ有スル場合ト

(1) 本論叢第四卷第三號拙稿「植民地ノ分類ニ就キテ」中「植民地ノ保護地」ノ項參照。

雖ドモ、其ノ員數ノ制限及統帥權ハ之ヲ保護國ノ司令官ニ委ヌルヲ通常トス、然レドモ法理上ヨリセバ保護地ハ未ダ純然タル保護國ノ領土ノ一部分ト稱スベカラザルガ故ニ、其ノ固有ノ法律・習慣・制度等ニ關シテハ根本的ニ改廢ヲ加フルノ權利ナク、唯保護國ノ利益及一般公安ノ維持ニ必要ナル限度ニ於テ變更ヲ要求シ得ルニ過ギズ。

保護統治ノ關係ハ歲月ノ經過ト共ニ漸次保護國ノ勢力ヲ保護地内ニ普及セシメ、終ニハ全ク獨立ノ存在ヲ失シテ純然タル領土即チ植民地ニ變ズルコト決シテ稀ナリトセズ、故ニ一般のニ之ヲ論ズル時ハ(固ヨリ例外ノ存スルコトハ『植民地ノ分類』論中ニ於テ述ベタル所ノ如シ)、<sup>(1)</sup>保護統治ハ最も安全ナル領土擴張ノ一方法ト稱スルヲ得ベシ、蓋シ最初ヨリ純然タル植民地ノ獲得運動ニ着手スル時ハ、實ニ第三國ノ妨害及關係諸國ノ物議ヲ惹起スヲ免レザルノミナラズ、獲得地方ニ於テモ亦往々反抗的ノ紛擾ヲ醸スノ虞レアリト雖ドモ、最初ハ保護關係ヲ結ビテ單ニ重大ナル權力ノミヲ收メ、漸次自國ノ勢力ノ扶植セララルニ從ヒ徐々ニ其ノ内政上ニモ關與シ、適當ノ時機ニ於テ全ク其ノ權力ヲ收メテ遂ニ之ヲ純然タル植民地ト成スコトハ、内外ニ對シテ最も安全且確實ナル方法タルヲ以テナリ、是レ近世各國ノ植民地獲得運動ノ此ノ方法ニ依頼スルコト甚ダ多キ所以ナリトス、近ク露國ノ蒙古ニ對スル政策ノ如キモ亦此ノ一例ニ過ギザルナリ。

(註) 過去ニ於ケル各國ノ保護統治ニ就キテ其ノ方法ノ最も巧妙ナルモノヲ索メバ、先ヅ指テ印度・土民ノ王國ニ對スル英國

(1) 前掲下註ノ項參照



上述ノ如ク印度諸王國ハ外政及條約上特別ノ合意ノ存スル事項ニ付キテハ制限ヲ受クルモ、爾餘ノ政務ニ關シテハ尙ホ固  
有ノ權力ヲ失ハザルガ故ニ、法理上ヨリセバ英本國及英國印度政府ノ法令ハ直接王國內ニ效力ヲ及ボスモノニ非ズ、然ルニ  
英國政府ハ最も巧妙ナル方法ニ依リテ、今ヤ其ノ法令ノ效力ヲ徐々ニ是等ノ王國內ニモ及ボスコトヲ得タリ。<sup>(1)</sup>即チ治外法權  
ニ基キ特別ノ地方ニ領事裁判制度ヲ設クル普通ノ例ニ倣ヒ、英國ハ印度王國內ニ於ケル自國民及在留外人保護ノ目的ヲ以テ  
特別ノ裁判制度ヲ設ケシガ、土民等ハ之ヲ見テ不完全ナル自國ノ法律ニ依リテ裁判ヲ受クルヨリハ、寧ロ此ノ特別裁判ノ支  
配ヲ受ケンコトヲ希望スル者次第ニ増加シ、從テ保護條約ノ規定ニハ毫モ牴觸スル所ナクシテ、單ニ合意上ノ裁判管轄權  
(Consensual jurisdiction)ニ依リ、自國ノ法令ノ效力ヲ印度王國內ニモ及ボサシムルニ至レルコトハ其ノ一ナリ、次ニ印度  
評議會令(Indian Councils Act)ハ印度ニ於ケル立法評議會(Indian legislative council)ニ對シテ、英國ノ保護ノ下ニ在ル印  
度王國內ノ英國民ニ關スル立法ノ權ヲ賦與セシガ、該立法權ノ作用ハ印度王國ニ駐劄セル英國政府ノ代表者及其ノ他ノ官吏  
等ニモ當然及ベキガ故ニ、彼等ヲ通シテ間接ニ王國內ニ自國ノ法令ノ效力ヲ及ボスヲ得ルニ至レルコトハ其ノ二ナリ、更  
ニ印度總督ハ印度諸王ト特別ノ協約ヲナシ、或事件ニ關スル訴訟例ヘバ鐵道・電信等ニ關スル問題ハ之ヲ英國ノ法律ニ據  
リテ審判スベキコトヲ定メ、斯カル點ヨリ自國ノ法令ノ效力ヲ印度王國內ニ及ボスニ至レルコトハ其ノ三ナリ、是等ノ方法  
ハ孰レモ保護條約ノ規定ニ違反スルコトナクシテ、然カモ實際上ニ於テハ保護地ノ内政ニ關與シ得ベキ最も巧妙ナル統治策  
ト稱セザルヲ得ズ。<sup>(3)</sup>英國ノ保護地ニ對スル政策ハ此ノ主義ニ依リ一方ニ於テハ在來ノ法律及慣習ヲ成ルベク保存シテ妄リニ  
之ヲ侵サザランコトニカムルト共ニ、他方ニ於テハ又諸種ノ方面ヨリ徐々ニ自國ノ法令ノ效力ヲ是等ノ地方ニ及ボサシメン  
トシツツアリ、而シテ此ノ政策ハ嘗ニ印度王國ニ對シテノミナラズ、馬來半島諸州ニ對シテモ亦同一ナリトス。

英國ノ保護統治ノ方法ヲ考察スルニ當リテ茲ニ一言スベキハ、埃及ニ對スル英國政府ノ統治方針是レナリ、埃及ハ國際法  
上ニ於テハ一九一四年十二月ニ至ル迄ハ土耳其ノ屬國ナリシモ、其ノ内政ニ關シテハ財政窮乏ノ結果一八七九年以後ハ英・佛  
兩國ノ統監(Controller-General)ノ指導ヲ受ケタリ、然ルニ一八八二年ノ内亂ニ際シ英國政府自ラ之ガ鎮壓ノ任ニ當リシヨ  
リ、翌八三年以後ハ兩國ノ指導ヲ受グルコトヲ廢シテ埃及王(The Khedive)ハ專ラ英國ニ依頼シ、從來ノ統監ニ代ユルニ英

(1) Lee-Warner, W. The Native States of India, p. 337 ff.  
(2) The Indian Councils Acts of 1861 and 1869; The Government of India Act of 1865.  
(3) Chailley. Administrative Problems of British India, p. 213 ff.

國政府ノ推薦セル財政顧問(Financial Adviser)ヲ用ヒ、該顧問ハ埃及政府ノ内閣會議ニ列スルノ特權ヲ與ヘラレ、財政上ノ問題ニ關シテハ必ズ其ノ同意ヲ經ルヲ要スルコトナレリ、然レドモ多年英・佛兩國ノ勢力ノ下ニ在リシヨリ在留佛人ノ數亦決シテ少カラズシテ、官吏及中流以上ノ階級間ニハ現今ト雖ドモ佛國文化ノ勢力尙ル可カラザルモノアリ、其ノ他外債整理(一八六二年ニ初メテ從來ノ國債銷却ノ目的ヲ以テ外債三百二十九萬二千八百磅ヲ募リ、爾來引續キ其ノ増加ヲ見ルニ至リ、一九一六年四月一日ノ現計ニ據レバ國債總額ハ九千三百九十萬三千磅餘ニ達ス)及裁判管轄權問題(International Mixed Courts)等ニ關シテモ複雜セル國際的關係存スルガ故ニ、英國ハ曾テ自ラ進ンデ埃及ヲ保護地トナサントセザリキ、埃及ハ一時財政困難ノ極ニ達シ内外ニ於ケル政府ノ信用空ク地ヲ掃フニ至リシガ、ろーど、くろーマーノ努力ニ依リ國內ノ產業殊ニ農業ヲ獎勵スルコトニヨリテ漸次財政上ノ基礎ヲ確立スルコトヲ得、現今ハ外債ニ對スル利子ノ仕拂等ニハ支障ナキ程度ニ迄國力ヲ回復シ得タルヲ以テ、各國共ニ其ノ功績ヲ認メ債權者等ハ磅ニ英國ニ對シテ感謝ノ意ヲ表シツツアルガ故ニ、夙ニ之ヲ保護地トナスコト敢テ難キニ非ザリシト雖ドモ、埃及ニ於ケル各國ノ複雜セル關係ニ顧ミ一九一四年十二月十八日ニ至ル迄ハ之ヲ保護地トナサズシテ、寧ロ其ノ名ヲ棄テテ實ヲ收メンコトニ力メ、財政上ノ改革ト共ニ諸般ノ内政整理ヲ斷行シ、事實上ニ於テ保護統治ノ實權ヲ掌握シタルコトハ注意ヲ值ス可キモノアリ。

反之、佛國ノ保護地ニ對スル過去ノ統治方針ハ、假令文化ノ程度ニ於テ多少見ルベキモノアル地方ニ對シテモ、一般ニ從來ノ制度ヲ棄テテ成ルベク速ニ自國ノ制度ヲ採用セシメンコトヲ主義トナセリ、例ヘバ佛國ノ印度支那地方ニ於ケル保護地ハ比較的進歩シタル社會制度ヲ有シ、支那官吏モ亦多年ノ經驗ニ基キテ各地方ノ實情ニ適合セル統治ヲ爲シタルガ故ニ、住民ハ概シテ平和的ノ生活ヲ樂ムコトヲ得タリト雖ドモ、一度佛國ノ勢力ノ扶植セラルルヤ急進的ニ是等ノ地方ニ自國ノ文物制度ヲ輸入セントシ、無經驗ナル自國ノ官吏ヲ送りテ諸種ノ干渉ヲ試ミ、經驗アル支那官吏ノ助言ヲ用ヒザルノミナラズ却テ之ヲ排斥セントスルノ方針ニ出デタルヨリ、住民ノ信用ヲ失シ其ノ統治上ニ少カラザル困難ヲ感シタルガ如キハ是レナリ、要スルニ佛國ノ保護地ニ對スル過去ノ政策ハ純然タル植民地ニ對スルト同ク、急進的ニ自國ノ制度ヲ移入セントシテ却テ失敗ノ事績ヲ殘シツアルコトハ、前掲英國ノ實例ト對照シテ後進植民國ニ好教訓ヲ與フルモノト謂フニ得ベシ。

(1) Earl of Cromer, Modern Egypt. 2 Vols. London, 1908.  
Earl of Cromer, Abbas II. London, 1915.

(2) Reinsch, C. G., p. 115 ff.  
Leroy-Beaulieu, P. La Colonisation chez les Peuples modernes, 6 édit., t. II, p. 160. et suiv.



## (二) 特許統治

古來植民地ノ擴張ハ私人ノ經營ニ成レル特許會社ノ活動ニ負フ所頗ル大ニシテ、特許會社ハ啻ニ植民事業ノ指導機關トシテ植民史上ニ重要ナル地位ヲ占メタルノミナラズ、又實ニ母國政府ノ直接統治ニ對スル準備機關トシテモ極メテ重大ナル任務ヲ盡シタリ、然レドモ一般のニ之ヲ論ズル時ハ是等ノ諸會社ハ第十八世紀ヲ界トシテ、其ノ前後ニ於テ設立ノ目的ニ差異ノ存スルコトヲ發見スルヲ得ベシ、即チ中世以後第十八世紀ノ末年ニ至ル迄ノ特許會社ハ主トシテ經濟上ノ目的ヲ有シ、一定ノ地域内ニ於テ通商上ノ利權ヲ獨占センコトヲ主眼トナシ、此ノ特權維持ノ必要上土民ニ對シテ政治上ノ權力ヲ行使シタルモノニシテ、最初ヨリ政治的ノ活動ヲ爲サンコトヲ目的トシテ設立セラレタルモノニ非ズ、彼ノ英國東印度會社ガ他ノ特許會社ニ率先シテ印度ニ於テ政治的ノ活動ヲ爲シタルガ如キハ、寧ロ例外トシテ之ヲ看倣スベキモノニシテ、蓋シ當時印度ニ於ケル佛國ノ勢力ニ對抗シテ自國ノ通商上ノ利權ヲ擴張セント欲セバ、勢ヒ政治上ノ權力ニ依頼スルノ他途ナカリシヲ以テ、東印度會社ハ佛國ノ勢力ヲ挫カントスルノ目的ヨリ、自國ノ政權ノ扶植ニ努メタルモノナリト稱スルモ不可ナシ、然ルニ中世以後ニ設立セラレタル特許會社ノ多クハ、一時隆盛ヲ極メタル重商主義的ノ經濟思想漸ク廢レ、重農主義及**あだむ、すみす**一派ノ所謂自由放任主義的ノ經濟思想ノ普及ニ伴ヒ次第ニ其ノ勢力ヲ失墜シ(註)第十八世紀ノ末年ニ及ビテハ殆

(1) Osgood, H. L. The Corporation as a Form of Colonial Government. (Political Science Quarterly, XI, p. 259 ff.)

ンド全ク衰頽ニ歸セシガ、前世紀ノ中葉以後歐洲諸國ニ於ケル植民熟ノ勃興ト共ニ、再ビ新ナル形態ノ下ニ新ナル目的ヲ以テ特許會社ノ設立ヲ見ルニ至レリ、即チ第十九世紀ノ中葉以後ニ設立セラレタル特許會社ハ當初ヨリ政治上ノ目的ヲ有シ、單純ナル經濟上ノ利權ノ獲得ヲ以テ満足セントスルガ如キコトハ、彼等ノ窮極ノ目的トスル所ニ非ザリシナリ、固ヨリ其ノ經濟的方面ニ於ケル活動ハ農・工・商業及採收業等ニ在リシモ、主タル目的ハ寧ロ一定ノ地域内ニ本國ノ政權ヲ扶植セントスルニ在リキ、從テ是等ノ特許會社ハ本國政府ニ代リテ或種ノ政治的行動ヲ爲スノ特權ヲ與ヘラレ、本國政府モ亦斯カル特權ヲ與フルノ結果トシテ、特許會社ニ對シテハ嚴密ナル監督ヲ加フルニ至レリ、此ノ如ク國家ガ特許會社ニ政權ノ一部ヲ委任シテ一定ノ地域内ニ其ノ活動ノ自由ヲ認ムルコトハ、要スルニ將來直接統治ヲ行ハントスル準備行爲、看做スコトヲ得ベシ。

(註) "Such exclusive companies, therefore, are nuisances in every respect; always more or less inconvenient to the countries in which they are established, and destructive to those which have the misfortune to fall under their government." (Adam Smith, *Wealth of Nations*, Bk. IV, chap. vii, part iii.)

加之、更ニ之ヲ他方ヨリ觀察スルモ、國家自ラ直接植民地ノ探險及其ノ獲得ニ從事スル時ハ往往他國ノ妨害ヲ招クノ虞レアルノミナラズ、私人的ノ活動ニ比シテ巨額ノ失費ヲ要スルコト多シ、故ニ斯カル場合ニハ寧ロ或種ノ特權ヲ與ヘテ之ヲ私人ノ企畫ニ委ネ、其ノ事業ノ完成ヲ待チテ徐ロニ統治ノ實權ヲ國家ニ收ムルノ却テ有利ナルコトアリ、蓋シ私設會社ハ成ルベク冗費ヲ節約シ

テ銳意事業ノ進捗ヲ計ラントスル點ニ於テハ、到底政府事業ノ比ニ非ザルヲ以テナリ、而シテ最近四五十年間ニ於ケル特許會社ノ多クハ斯カル必要ニ應ゼンガ爲メニ設立セラレ又能ク其ノ目的ヲ達スルコトヲ得タリ、例ヘバ前世紀ノ末葉僅々二十五箇年間ニ英國ノ亞弗利加内地ニ於テ獲タル植民地ハ二百五十萬方哩ニ達シ、然カモ其ノ三分ノ二以上ハ私人ノ經營ニ成レル特許會社ノ力ニ依リテ獲得セラレ、殊ニ其ノ費用ノ極メテ僅少ナリシガ如キハ之ガ好例タリ。<sup>(1)</sup>

特許會社ニ賦與セラルベキ特權ハ各國各場合ノ事情ニ應ジテ固ヨリ一樣ナラズト雖ドモ、其ノ根本主義ニ至リテハ共通且同一ナル點多シ、今其ノ主ナルモノヲ擧グレバ、國家ハ特許會社ニ對シテ國籍ノ保存ヲ要求スルト共ニ、一定ノ地域ノ統治ニ必要ナル行爲例ヘバ法律命令ノ執行及之ニ代ルベキ制令ヲ發シ、無主地ノ先占・處分又ハ土地ニ關シテ自由ニ土民ト契約ヲ締結スルノ權利ヲ有シ、政費ヲ支辨センガ爲メニ租稅ヲ賦課シ、公安維持ノ目的上警察權ヲ行使シ、又政務ノ執行ニ必要ナル行政官及司法官ノ任免若クバ之ニ參與スルノ權利ヲ與ヘラルルガ如キハ是レナリ、<sup>(2)</sup>特許會社ハ是等ノ一切ノ行爲ニ付キテ本國政府ノ監督ヲ受クベキハ勿論、其ノ許可ヲ得ルニ非ズンバ濫リニ自己ノ權利ヲ他ニ讓渡スコトヲ得ズ、會社ノ政務ノ統轄者ノ任免ニハ本國政府ノ認可ヲ要シ、政府ハ又常ニ内治外交上ニ必要ナル注意ヲ與ヘ、土民ノ法律・習慣及宗教等ニ關シテモ善良ノ風俗ヲ害セザル限リハ力メテ之ヲ保存シ安リニ侵スコトナカラシム。

(1) Reinsch, C. G., p. 156.

(2) Köbner, Otto. Einführung in die Kolonialpolitik, S. 73-74.  
Reinsch, C. G., pp. 152-153.

上述ノ如ク私人ノ經營ニ成レル特許會社ニ國家ノ高權ノ一部ヲ委テ植民地統治ノ任ニ當ラシムル方法ハ、國家自ラ植民地ノ擴張及之ガ維持ニ必要ナル經費ヲ支辨シ難キ事情アルカ、若クバ直接統治ノ機關ヲ設ケテ之ヲ統治スルコト能ハザル特別ノ理由存スル場合ニハ、止ムヲ得ザル一時的ノ制度トシテ之ヲ認ムルノ他ナシト雖ドモ、近世ノ國家觀念及法治主義ノ精神ニ溯リテ稽フル時ハ、私設會社ニ廣大ナル特權ヲ與ヘテ自由ニ土地ヲ領有セシメ且之ヲシテ永ク政治上ノ權力ヲ行使セシムルガ如キハ、諸種ノ弊竇ヲ醸スベキ劣惡ナル制度ト稱セザルヲ得ズ、蓋シ近世ノ國家觀念及法治主義ノ精神ヨリセバ、國家以外ニ私人又ハ私設ノ會社ニ統治權ノ行使ヲ許シ得ベキ餘地存セザルヲ以テナリ、加之、更ニ之ヲ國際關係上ヨリ考察スルモ、特許會社ニ國家ノ高權ノ一部ヲ委テ植民地統治ノ任ニ當ラシムル國ハ、其ノ統治ノ結果ニ付キテハ自ラ外部ニ對シテ最終ノ責任ヲ負擔スルノ覺悟ナカルベカラズ、果シテ然リトセバ假令特許會社ニ統治權ヲ委ヌルモ、國家ハ常ニ其ノ統治ノ實績ニ注意シ、必要アル場合ニハ干涉ヲ加フルト共ニ可及的責任ノ加重ヲ避クルコトニ努メザル可カラズ、然レドモ此ノ如クンバ最初ヨリ國家自ラ直接統治ノ任ニ當ルノ却テ簡捷ナルニ如カザルベク、又植民地自己ニトリテモ國家ノ統治機關ト全ク性質ヲ異ニセル私設會社ノ支配ノ下ニ植民地ヲ放任セラルルコトハ、其ノ住民ニ對スル統治ノ公平ヲ失スルノ嫌ヒナキ能ハズトノ非難ヲ生ゼシメ得ベシ、斯カル對內的及對外的ノ諸種ノ理由ヨリ、各國ハ嘗

テ一度特許會社ニ賦與シタル政治上ノ權力ヲ、現今ハ再ビ國家ノ手中ニ收ムルニ至レリ。<sup>(1)</sup>

次ニ又經濟上ヨリ之ヲ觀察スルモ、私設會社ハ其ノ性質上一般ニ事業利益ノ増加ヲ計ランコトヲ主眼トナスガ故ニ、往々植民地ニ於ケル自然的ノ富源ヲ誅求シ、或ハ土民ノ勞力ヲ酷使スルニ至ルノ弊ナシトセスト雖ドモ、國家自ラ植民地統治ノ任ニ當ル時ハ、母國及植民地ノ永遠ノ利害ヲ基礎トシテ一切ノ政策ヲ樹ソルコトヲ得ベシ、固ヨリ私設會社ニ特權ヲ賦與シテ植民地統治ノ任ニ當ラシムル場合ニ、國家ハ是等ノ點ニ關シテ嚴重ナル監督權ヲ留保シ得ザルニ非ザルモ、斯カル間接的ノ國家ノ監督權ハ、普通植民地ノ如キ隔在セル地方ニ在リテハ其ノ實效ヲ奏スルコト頗ル難シ。以上ノ他植民地ニ於ケル母國ノ移住者ニ對スル關係ニ付キテモ、特許會社ハ獨占的ノ地位ヲ有スルヨリ、自己ト競立スベキ母國民ノ活動ノ自由ヲ妨ゲ其ノ範圍ヲ狹小ナラシムル結果、延テ植民地自體ノ發展ヲ遲緩ナラシムルノ虞レアリ。<sup>(1)</sup>

要之、其ノ本來ノ性質ヨリ論ズル時ハ私法上ノ團體タル特許會社ニ、公法上ノ團體タル國家ノ權力ノ行使ヲ委ヌルコトハ、如何ナル點ヨリ考フルモ決シテ永ク之ヲ許ス可キニ非ズ、是レ近時各國ガ徐々ニ特許會社ノ政治上ノ權力ヲ奪ヒ、若シ其ノ必要アル場合ニハ單ニ經濟上ノ一機關トシテ之ガ存立ヲ認ムルニ至レル所以ナリトス

(註) 特許會社ノ維持ハ特ニ政府ノ補助ヲ受クル場合ノ外ハ、通常ハ株主ノ出資及其ノ事業ヨリ生ズル收益ニ依ル他途ナキガ

(1) Köbner, a. a. O. S. 82-83.  
Zimmermann, A. Kolonialpolitik, S. 89 fg.  
W. Roscher u. R. Jannasch, Kolonien, Kolonialpolitik und Auswanderung, S. 285 fg.

故ニ、設立後數年間ハ何レノ會社モ株主ニ對シテ満足ナル利益配當ヲ爲スコト能ハザルヲ常トス、前世紀ノ中葉以後ニ設立セラレタル英國ノ特許會社ノ如キハ、僅カニ「ローヤル・ナイグ・ニグ」會社(一八八六年設立)ニ於テ數年間六分ノ配當ヲ爲シタル他ハ、北ぼるねを會社(一八八一年設立)ハ一分、東亞弗利加會社(一八八八年設立)及南亞弗利加會社(一八八九年設立)ハ無配當ノ狀態ニ存シタリ、然レドモ株主等ハ有形ノ利益配當ヲ度外ニ置キ、植民地ノ發展ヲ以テ最も重大ナル國家的ノ事業ト看做シ、愛國的ノ熱誠ヨリ特許會社ノ株分ヲ所有センコトニ力メタルヲ以テ、其ノ價格ハ額面以上ノ市價ヲ維持スルコトヲ得タリ、特許會社ハ假令租税ノ徵收權ヲ有スルモ、這ハ固ヨリ政費ノ支辨ニ應ゼンガ爲メニシテ、株主ニ對スル利益配當ノ目的ヲ以テ課税ヲ爲スコトハ之ヲ許サザルガ故ニ、南亞弗利加會社ニ於テハ創立者セシム、ローヤル・ナイグ・ニグハ私人又ハ私人ノ團體ニ植民地ニ於ケル採鑛權ヲ與ヘ、之ヨリ生ズル所得ヲ株主ニ對スル配當ニ充ツルコトヲ發案シタリ、然レドモ此ノ方法モ亦他方ヨリ之ヲ觀察スル時ハ頗ル弊害ナキ能ハズ、何トナレバ鑛物採掘ノ如キハ國民ノ植民地ノ活動ヲ刺激スベキ最も重要ナル富源ノ一タルニ拘ラズ、之ヲ私人又ハ私人ノ團體ニ殆ンド獨占的ニ許可スルガ如キハ、將來ノ移住者ニ對シテ機會均等ノ利益ヲ失セシメ、從テ彼等ノ植民地ノ發展ヲ妨グルノ原因トナルベキヲ以テナリ。

近時ノ特許會社中海外ニ於テ自國ノ政治的勢力ノ扶植ニ努メ、且其ノ功績ノ最モ顯著ナリシモノハ英國ノ特許會社ニシテ、就中 Sir Alfred Dent ニ依リテ創立セラレタル北ぼるねを會社(The North Borneo Company). Sir George Taubman Goldie ニ依リテ創立セラレタルローヤル・ナイグ・ニグ會社(The Royal Niger Company). Cecil Rhodes ニ依リテ創立セラレタル南亞弗利加會社(The British South Africa Company)ヲ以テ其ノ最タルモノトナス。

北ぼるねを會社ノ創立者でんごハ、最初單獨的ニ北ぼるねを地方及其ノ附近ノ島嶼ノ統治權ヲ土民ノ王(Sultans)ヨリ得タルヲ以テ、會社ヲ組織シテ協同的ニ是等ノ地方ヲ開發セント欲シ英國政府ノ特許狀ヲ求メシガ、保守黨内閣ハ之ヲ許可セザリシモ自由黨内閣ノ時ニ至リ植民大臣ウーレンびる(Lord Grenville)ハ、國家ガ植民地ニ對シテ直接統治ヲ行フカ然ラズンバ之ヲ放棄スルカ、二者其ノ中間ニ立チテ植民地ヲ處理スル最良ノ方法ハ、特許會社ヲ認許スルニ在リトノ意見ニ基キ、該請求ヲ容レテ植民會社ニ政治上ノ特權ヲ與フルノ例ヲ開キタリ、然ルニ當時政府ハ特許狀ノ交付ハ必ズシモ其ノ地方ニ對スル主權ノ確立又ハ保護地ノ創設ヲ意味スルモノニ非ズトノ見解ヲ有シ、特許會社ノ領土權ト英國政府ノ領土權トナ全、別

箇ノモノノ如クニ看做シタリト雖ドモ、法理上ヨリ之ヲ論ズル時ハ、其國民ノ占領セル土地ハ結局其ノ國民ノ屬スル國家ノ領有ニ歸ス可キモノナリトノ議論勝利ヲ制シ、遂ニ一八八八年英國政府ハ北ぼるねを會社ノ占領地ト共ニ北ぼるねをヲ正式ニ自國ノ保護地中ニ加フベキコトヲ宣言シタリ<sup>(1)</sup>。

ろーやる、ないぢ。ー會社ノ設立ニ關シテハ更ニ注意ス可キモノアリ、即チ該會社ノ創立者であるでいーハ一八八五年伯林ニ於テ開カレタル國際會議ニ列席中、適マ獨逸ノ一探險者ガ士長ノ會長等ト保護條約ヲ締結セシガ爲メニ、近クないぢ。ー地方ニ遠征シ企テントシツツアルコトヲ探知シ、其ノ機先ヲ制セントシテ直チニ自己ノ代理人ヲ同地方ニ派遣シ、獨逸ノ探險者ノ未ダ到ラザルニ先ダチテ會長等ト條約ヲ締結セシメ、斯クシテ僅々數箇月間ニ西部亞弗利加地方ノ占領ヲ成就シテ此處ニ英國ノ政治的勢力ヲ扶植スルニ至レリ<sup>(2)</sup>。

南亞弗利加會社ハせしる、ろーやるニ依リテ創立セラレシガ、該事業モ亦主トシテ獨逸及葡萄牙ノ植民的活動ニ對スル英國ノ對抗策トシテ計畫セラレタルモノナリ、即チ會社設立ノ當時ハ何人モ同地方ノ經濟的價值ニ就キテ多大ノ希望ヲ囑スル者ナカリシモ、之ヨリ先キ既ニ獨逸及葡萄牙ノ探險者等ハ盛ニ士民ノ會長ト交通シ、殊ニまたべるらんと及まじやらんとノ支配者ト相接近スルノ傾向アリシヨリ、せしる、ろーやるハ富源ノ如何ヲ深ク顧ルノ開無クシテ直チニ會長ト保護條約ヲ締結シ、南亞弗利加會社ヲ組織シテ政府ノ認許ヲ受ケ、斯クシテ亞弗利加縱斷北進計畫ノ基礎ヲ据ユルコトヲ得タリ<sup>(3)</sup>。

獨逸ノ特許會社ハ其ノ政治的活動及本國政府ノ直接統治ノ準備の行爲ヲ爲シタル點ニ於テハ、英國ノ特許會社ニ及バザルコト遙カナリト雖ドモ、新領土内ニ本國ノ勢力ノ普及ヲ計リタル功ハ之ヲ沒ス可カラザルモノアリ、殊ニ獨逸ノ特許會社ノ代表者等ハ頗ル外交的ノ手腕ニ富ミ、常ニ植民地住民ト親密ナル關係ヲ維持センコトニ努メタルハ注意スベキ點ナリトス、獨逸ノ特許會社中西南亞弗利加會社 (Deutsche Colonial-Gesellschaft für Südwestafrika) ハ政治的活動ヨリハ寧ロ經濟的活動換言セバ該地方ニ於ケル富源ノ開發ヲ以テ主眼トナシ、東亞弗利加會社 (Deutsch-Ostafrikanische Gesellschaft) 及こーぎにあ會社 (Nou-Guinea-Kompagnie) ハ一八八五年ニ英國ノ特許會社ニ類セル政治的活動ノ特權ヲ與ヘラレタルモ、植民地ノ發達ニ伴ヒ私人的ノ企業ハ到底國家ノ高權ヲ托スルニ適セザルコトヲ覺リ、前者ハ一八九〇年ニ後者ハ一八九八年ニ何レモ從來會社ニ委任セル政治上ノ權力ヲ政府ニ回收スルニ至レリ<sup>(4)</sup>。

- (1) Reinsch, C. G., pp. 149-150.
- (2) Lucas, C. P. Historical Geography of the British Colonies, vol. III, West Africa, p. 146 ff.
- (3) Worsfold, W. B. The Union of South Africa, pp. 116, 172 ff. Lucas, vol. IV, South and East Africa, p. 77 ff.
- (4) Michell, L. Life of the Right Hon. Cecil J. Rhodes. London, 1910. Köbner, a. a. O. S. 73-75. Stengel, K. v. "Die deutschen Kolonialgesellschaften, ihre Verfassung und ihre rechtliche Stellung." (Schmoller's Jahrbuch, 1888, S. 219 fg.)